般 演

『諸病 源候論』 における歯病の

50

医説に関する考察

戸 出 郎

足の陽明脉と足の太陽脉が歯に入る。歯は骨の終る所、 では経脉の走行を用いて病態の説明をしている。 とは言うまでもない。 というのである。これは内経の医説に基く病理論であるこ に歯周組織に疼痛 の養う所で、 した場合には、風または風冷の邪気が経脉に入り、歯牙並び 二十一項に分けて記載されているが、そのうち大多数の項 『諸病源候論』巻二十九、 もし経脉が虚の状態になったり、 ・腫脹・化腸・出血等の症状をひき起す 牙歯諸病には、 歯牙の症候が 髄気が不足 即ち、 手 髄

風

右のように『諸病源候論』における牙歯諸病の病因

一は風

これらの病因論の由来について考察

理論を述べ、その後に蟲による歯牙の蠧蝕が歯痛の病因と 例えば牙歯痛候・牙痛候・歯痛候では、 しかし同一症候内で内経にない理論も述べられている。 はじめに内経的病

> 歯痛の病因として大切な要素と考えられていた して並記されている。これは内経の医説に関係はないが、 ので

蟲候・歯蟲候として挙げられている。この三項では、 も同じである。 よく似ており、終りの一項に養生方を引用しているところ 歯牙を食して孔をあけ、 う。その他の症候では、抜歯損候の外傷を除いてはすべて 蟲が歯を食して歯齗に達し、 ふれていないのはこの三項と歯医候のみである。 ついて全く触れていない点である。牙歯諸病の中で経脉 る。この三項の立て方は前の牙歯痛候・牙痛候・歯痛候と 蟲による歯痛については別に項目を設け、 ・冷を病因とする経脉説によって説明されてい しかし前者と決定的に違うところは経脉 歯牙の疼痛をひき起すと記述して 化膿するに至ったものを言 牙歯蟲候·牙 歯医候は

は内経の医説に基いてなされているが、 風 ・冷を病因とし、 経脉の変動によって起る症候の解説 蟲については立場

を加えてみたい。 冷並びに蟲であるが、

を異にするものである。

ち、『諸病源候論』以前のものについて調査した。いので、『医心方』『外台秘要方』に引用される 方 書 の うい がある は 現伝 するものが極めて少な

方に「皀莢去皮塗上虫出」とある。 動作…」とあり、『小品方』に「治甘虫食歯根方」と、又動作…」とあり、『小品方』に「治甘虫食歯根方」と、又に「…置虫歯上…」「…吐虫長六七分皆黒頭」「…虫下不得に、『葛氏方』が変が、の又方三例

王堆漢墓帛書』の『五十二病方』中に「貮食歯、以楡皮、病源候論』以前に成立したものであるが、更に遡れば『馬を病因とする歯病の記録が散在する。これらの方書は『諸を病因とする歯病の記録が散在する。これらの方書は『諸

とある。

示したものであろう。 が歯を食った場合に楡皮以下の処方を齲窩につけるよう指食歯は齲歯のことである。貳は苗葉を食う虫で、本文は虫食歯は齲歯のことである。貳は苗葉を食う虫で、本文は虫

原因を臂陽明脉・歯脉 (是動病・所産病) として記述されている。 所属と発病の機序が述べられている。 陽十一脉灸経甲本』『同乙本』があり、 いているのである。 因を他に求めることなく、 『五十二病方』の他に同帛書には『足臂十一脉 (いずれも手の陽明脉) 経 脉 (臂陽明脉 しかしこの場合、 歯の経脉における 即ち、 ・歯脉) の変動に 歯 痛の の病 病

馬王堆漢墓の医書は恐らく秦代から前漢にわたる時代の医学の記録であろうから、歯病の原因を経脉の変動に求める医説と、虫の蠧蝕によるとする医説は、互に無関係ではないにしても、それぞれ系統を別にしてその頃からあり、ないにしても、それぞれ系統を別にしてその頃からあり、ないにしても、それぞれ系統を別にしてその頃からあり、ないにして来たものであろう。

この二つの系列にある病理論を併合し分類して記述された『諸病源候論』 における 牙歯諸病の症候分類と医説は、

倉公淳于意 その二

家

本

誠

はしがき

である。その経歴は 『史記』の 『扁鵲倉公列伝』 に詳しである。その経歴は 『史記』の 『扁鵲倉公列伝』 に詳し

項目にわたって詳細に記されている。例が報告されている。その各々の症例報告は、次のような例が報告されている。その各々の症例報告は、次のようない。これについては後段で考察する。

病名 症状 治療 転帰

病因 診断 病理 病位

私はこれらの項目について、倉公の記載する所と『素問』私はこれらの項目について、倉公の記載する所と『素問』を明らかにしたいと考える。